

△資料翻刻▽ 『芸備孝義伝』三編 (十三)

鈴木 幸 夫

〔題箋〕
「芸備孝義伝 三編 世羅 三谿 卷十三」

芸備孝義伝 三編 卷十三

備後国世羅郡

甲山町嘉吉

青水村梅軒女ミる

小谷村多藏

津口村権平夫婦

飯田村辰之助夫婦

伊尾村元右衛門妻つい

老歩村八右衛門

同村岩五郎

小童村万吉

篠村平六

備後 三谿郡

向江田村良左衛門

和知村喜三郎」(目録オ)

吉舍川之内村平左衛門

高杉村音平

小田幸村要助妻なを

清綱村小七郎」(目録ウ)

芸備孝義伝 三編 卷十三

世羅郡

○甲山町嘉吉

嘉吉ハ母に孝なるをもて、天明七年、寛政六年賞を蒙りしこと初編に見えたり、其後の状を按ずるに、かれもとより貧しき民なれば、農事の余にハ傭夫かせぎをなしけるが、いつも人より早くゆき、人のやすらふ時おのれハ歸りて母の安否をたづね、仮令よき利を得ることありとも隔りし処へハ絶てゆくことなし、冬ハ「(一オ) 暖にし、夏ハ涼くし、よろづ意をくばりてまめやかにつかふること、年を歴て猶たゆまざりければ、寛政十二年申の六月かさねて米七たわらをたまひ、文化二年先公天祐遊獵のとき召見給ひ、鳥目一貫文を下されける(一)下のミる、も同じ

○青水村梅軒女ミる

ミるハ八歳にして母を喪ひ父梅軒につかへて孝なり、父ハ医を業とせしがいたく老ければ、ミる朝ハとく起き父が目醒をまちて煙草を進め、父起出ればやがて「(一ウ) 湯をくみて盥漱 しめ、夜ハ寝具をしきつくるひ、いつもそひ臥して幾度となく寢息をうかぐひ、厠にゆけば手をとる腰をか、え、すべて昼夜のわかなく左右に就養ふこと、年を経てますます厚し、かくてミるも歳三十にちかくなりしかば、兄および親族うちよりて嫁を勧めしに、ミるいへるハ、

わが身幼くして母に離れ、父上のミの養育にてかく成長せしなれば、その高恩たとふるにものなし、その上父も七十にこえ、年々老傾き給へば、今他へ嫁してハわが心の安からぬ」(2才)のミか、父もまた不自由なるべし、阿兄夫婦もおはすれど、児輩も多く農業もいそがハしければ、老人につかふることハ心のまゝならぬこともあるべし、されバわが身家にありて、心のかぎりつかへさふらひたくこそ思ひ侍れといひて、孝道のミをはげミ、年を経てますます厚かりければ、享和元年酉の六月、文化四年卯の六月、同じ十年酉の五月、文政二年卯の六月、頻りに五俵の米を給ひて賞せらる、この梅軒も質直なるうまれつきにて、人を恵むこゝろふかく、貧しくて薬の謝儀をもなし得」(2ウ)がたきものかれを迎ふるときハ、疾くその家に往て懇に療治をくハへ、富人むかふる時ハ、我輩ごとき草沢医の薬ハ貧しきものにハき、さふらへど、富家の人には効なし、名ある医のあまたあれば、それをこそたのミ給ふべけれ、といひてゆかざりしとぞ、

○小谷村多蔵

多蔵ハ上伊尾村の奉祠越後が子にて、この村兵三郎が婿養子となり、よく養父母につかうまつり、村人へも親ミ厚く、おのれ長百姓なるをもて、殊に年の租を」(3才)慎ミて他をひきあければ、人々も共に励ミていつも早く納めける、父死してのち、母を孝養すること年をかさねてたゆミなく、母いたく老てハ、夫婦のものの朝ハ盥水を進めて母が顔をあらひ、夜ハ撫でさすりつ、四方やまの物語

をなし、殊さら飲食起居に意を配り、しばらくもその側を去ることなし、日々農業の出入よりして、すべて他にゆくことある毎にそのよしを告、母がゆるすをまちてのち往き、帰ればありし事どもこまかに語りきかせて慰めける、平生小事たりとも、母に請ずして」(3ウ)専に行ふことなし、されバ妻子もこれにならひてミな孝順なり、文化六年巳の十二月賞せられて五たわらの米を給はりける、

○津口村権平夫婦

権平ハ本郡三郎丸村逸八といふもの、子なり、十二三歳のころ幾右衛門が婿養子となりける、人となり温順にして年長ずるにしたがひ孝心殊に深く、平生の行も人に超たり、妻のよちも夫におとなぬものにて、父母につかふること至らぬくまなし、母ハよちが継母」(4才)なるが、もとより頑なるに、その夫死して後ハ、心いよく辟いて万ほしいまゝにふるまひ、酒に耽ること甚し、夫婦のもの朝毎に母が寢処にゆきてきげんを伺へバ、母ハ目さむるや否や茶をくめよといふ、夫婦つねに心得しことなれば、いつも温めし酒をもちゆきて飲み、夜半とても目さめし時ハまた同じさまなり、されバあらかじめその頃を考へて温めおき、幾度となく進めけれど、日々の事なればその好ミし時、たましく温まりてあらざるか、或ハ酒尽て買と、のふる間ありて、その」(4ウ)進むること纔におくる、ことあれば、汝ら親を饑餓せしむる不孝ものなり、夫婦もろとも児輩までひきつれて何地へなりとも出ゆけと、気疎く

怒いかり罵ののしりける、かゝる時ときハ鄰となりのものをたのミてわびことし、偏ひとへに我われらが罪つみなりと誠まことを竭つくしていひけるとなり、母はは又また時としてハ朝あさより飲のみつゞけ、大おほいに酔よめつぶれて、或あるハ狂くるはしくあるハ終ひつ日もすうち臥ふすこともありけるにより、かくてハ身みのためよからじとおもひて諫いさめとゞめんとせしに、母にハかに怒いかりを發おこし、近ちかきあたりの親うたしき人のミか、(5才)

〈挿絵第一図〉(5ウ・6才)

ゆかりもなき門かど通とほるものまでを呼よび入れて酒あひて伴はなとし、却かへつて劇おほ飲のみをなしけるにぞ、其その後ちハその好このミにまかせおきぬ、かゝりしより母ハ心のまゝに酒さけにふけり、費つひえも殊ことに多おほけれバ、夫婦ふうふ常に饑うま寒ごをしのび、農業のうげふの余よにハさまぐの賃あつ作しして酒れうの料かとなし、母にハ乏うましきさまを知らしめず、或ある時ときハ他た郷きやうの馬うま商あきんどハ権平けんへいが母のかく酒さけを好このむを知しるにや、権平けんへいが他ほかに出いしときをうかゞひ、酒さけを携たづ来きたり母をもてなしていたく酔よめしめ、さまぐにすかしこしらへて、牛屋うしやに繋つなげる牛うしを己おのが牛うしと取とり(6ウ)換かへてゆき去さりぬ、権平けんへい歸かへりてそのよしを聞きゆきて視みるに、己おのが飼かひ置おきし牛うしよりその牛うし甚うしよからず、近隣きんりんのものもこハ理すぢなき事ことなり、いざもとの牛うしを取と返かへすべしとす、めけれど、権平けんへいハ、ともかくにも母の計はからひしことなれば、たとひ損失そんしつありとも母の心こころを痛いためんこと如何いかなりとて、そのまゝ、になしおきけるとぞ、権平けんへい持もつて田地でんちその歳額さいがく六石余あまなるが、地殊ちじゆにあしく、動うごすれば水みづ早みづにそこなはれて登のぼらざること多おほけれど、租そを納をさむるこいつも早くして、縄俵なはたわらまで美うらしく、またよく(7才)礼節れいせつを重おもじ、佳節せつ朔望しやくぼうにハ村長むらさきの家にいたりて礼れいをのぶること年久としひさしく怠おこらず、隣里あたりに病やめるものあれば、昼夜ちゆうやをわかずとく訪往とひやうきて医藥いやくのこと

などを謀はかり、農事のうじに後おくる、ものあれば、力ちからをそへて助け、或あるハ道橋みちはしのそこねたるを修をさめ、旅人たびとの路みちにふミ迷まよひたるものをバ道みちしるべし、行暮ゆきくれたるものにハ松明たいまつを与あたへけるなど、その美事みじあげて数かずへがたし、かずくのこと状じやうをそなへてまうし出いでければ、文政十一年ぶんせいじゅういち子の三月さんげつ夫婦ふうふに米七俵こめななばらを給くひてその行おこなひを旌あらはさる、(7ウ)

○飯田村辰之助夫婦

辰之助たけのすけハ父ちちを惣はといふ、母ハ繼母けいぼなり、辰之助たけのすけつねに敬うやまつかうまつること眞母しんぼに異ことならず、異腹いふくの妹いもうと五人あり、三人ハ他に嫁よめいりし、残のこる二人ハミな瘡かさにて娶めとる人のなければ、父母ふはの膝下ひざもとにありて育やハれぬ、かゝる廢疾かたはの子こを殊ことに愛いとく憐れむハ親おやの常とこなれば、辰之助たけのすけその心こころをおしはかりて、かの二人をいつくしむこと最もつともいたれり、妻つまのるめも心こころはへ美うらしく舅しやうしやうとめ 姑こをいたはり、小姑こしやうとめに懇ねんなること類たぐひまれなり、父ちちハはやく身みまかり、(8才)母ハ年老としおいてつねに多病たびやうなれば、夫婦ふうふのものかはるく側そばにありて介保かいほうし、快こころよきをりハ扶たすけて寺詣てらまうでなどなさしめける、辰之助たけのすけもとより生産さんぱん乏ひとともしきかななるに、さきに嫁よめいりせし妹いもうと不幸ふしあはせにして、夫をにおくれ子こ二人までつれかへりしが、夫婦ふうふこれをあはれむこと甚はなはだふかく、侄男女をひめひをも我子わがこのごとくして生おひたせしとぞ、天保五年てんぽうご午うまの五月ご夫婦ふうふに鳥目七貫文くわんもんを賜たまひて賞しょうせらる、母没ぼつして後三年のち、辰之助たけのすけ六十五歳さいの時ときなり、

○伊尾村元右衛門妻つまい(8ウ)

ついハ直兵衛ちくべゑといふもの、女むすめなり、二十歳はたちばかりにして元右衛門もとゑもんに

嫁し、よく婦の道をまもりて舅姑に敬順ひける、舅久しく病しについ常に側にありて看護り、病甚しくなりてハ起臥をたすけ、二便のけがれを洗ひそ、ぐなど、ミナ人の手をからずして残るところ所なくつかへれば、舅もついが介保ならでハ心安からずおもひて、頃刻も側を離れしめず、舅はてし後ハ姑につかへて殊に力を尽し、夜臥具をまうくるにハ、いつもおのれ先臥してその安や否やを試みて姑をいねしむ、(9オ)のち姑中風をやめるに及てハ、その身冷がちなれば、そひ臥し小児を抱くごとくしてあた、め、又しばく風呂をわかし、ミづから抱か、えて浴をもなさしめける、その心を尽すこと皆このたぐひなり、されバ姑もついを慕ひて、もしや媳が親里へ帰去ることもあらば、我ハ誰をたのミとすべきなどつねくいひしとなむ、元右衛門も孝心なるものにて親によくつかへけれど、妻が殊に親の心になへるにより、看病のことハ皆かれにゆだね、己ハ農業を専らとし、朝夕の炊爨など、(9ウ)すべて妻のなすべき事までも計らひければ、ついハ家事に心をおかずして孝養をのミ尽しける、姑死して後辰之助夫婦と同じく賞せらる、

○志歩村八右衛門

八右衛門ハ長四郎が次男なり、兄太四郎ハさきに別家せしかバ、八右衛門に家を譲るべけれど、かれ生質虚弱なるをもて、生産を営むこといかゞあらんと思ふさまなりければ、八右衛門其意を承順がひ、弟織三郎に妻を迎へて家を継しめ、おのれハかゝりうとの如くにて、(10オ)二親に孝養せり、父死してのち母につかふることま

すく厚く、年六十に過れど猶妻をむかへずして、専ら老母のやしなひに力を尽しぬ、つねに己ハあらき食ひ母にハ米のめしをそなへ、他に出ることあればそのよしを告、帰ればありしことなど語り聞せ、珍しきものあればかならず取歸りてす、む、母よはひ九十にあまりぬれば、いかにもして老の心を慰めばやと思ひけるが、母ハ気の軽きものにて小曲など歌ふことを好みしかバ、三絃を買てあたへければ、母ふかく悦びて、(10ウ)

〔挿絵第二図〕(11オ)

日々これをひきて楽ミとなしけるとぞ、兄太四郎子あり孫あり、妹二人もすでに他に嫁しておのく子を産たれば、兄弟侄男女すべて四十人に過ぬれど、皆同じころにむつび合しも、八右衛門が孝友の厚きによるなるべし、天保七年申の四月、そのよく父母につかへ、一家のうち睦じきを賞して鳥目五貫文を下し給ふ、こ、ハ国老浅野孫の采地に係れば、彼家よりも文政十三年銭二貫文をあたへらる、

○同村岩五郎

○小童村万吉(11ウ)

岩五郎ハ父を長六といふ、長六久しく病に臥し、持る田地も売却ひ、今ハ其歳額もわづかにて貧しき日々にせまりしが、岩五郎耕作のほかに傭夫かせぎなどして、父が食物薬餌の資となし、身にハ夏のわかちなくやぶれたる衣をまとへど、父が衣類をバ時に応じて力のかぎり供へずといふことなく、奉養にのミ心を尽しければ、人皆あはれミて何くれと助くるもの多かりし、文化十一年国老浅野孫より賞して米二俵を与へらる、彼の家の采地なればなり、(11ウ) 次の方吉、○

万吉ハ(12才)早く母に離れ、父金次郎と俱にかすかに世を渡りしが、父ハ常に多病にて後遂に両眼盲たり、万吉幼よりこれを保護すること並ならず、耕作の暇にハ人に雇れ、その賃錢を得て生計のたすけとなしぬ、人のもとにて物食ふ毎に、その下飯のさまで味よき物にあらざるをも、必取帰て父にそなへ、また常に麦の粉を貯へおき、香煎となしてそのつれぐを慰める、この村ハことに寒地なれば、冬ハ爐に火を絶さず、夜もかの香煎などす、めてあた、かならしめ、専ら寒の防に心を尽せり、(12ウ)かれとし三十に及びければ、妻をむかへよと勧むるものあれど、われら貧しきなかに妻ありてハ孝養の妨ともなるべしとて、曾てその言に随がはず、またよく年租をつ、しミ人と交るに信ありとぞ、文政十年米三俵を恵まる、

○篠村平六

平六ハ心いさぎよくして、上を敬ひ年租をつ、しミ、縄俵までも美ハしくと、のへて早くをさめ、其身ハ質素を守りて、家の内つねに和睦し、人と交るに信あり、(13才)又患あるを恤ミ、病るを助ること甚懇なり、平生傍輩を諭しみちびき、人ハ懦弱に身を持ときハ、おのづから奢侈の意を生じ、美食美服を求るに至りやすし、たゞわれくの職業に心をこらし身骨をくだけバ、麤食も味あり麤服も寒からずといひて、ミづからその言の如く行ひければ、人もまた信じ従ひぬ、およそ愚なる民ハ専ら仏のミをたふとむもの多けれど、平六ハ神仏ともに敬ひて、常に産土神の祠の前をも清らかに掃除しけるとなん、文政四年代官より賞して

鳥目一貫文を(13ウ)与へらる、

三谿郡

○向江田村良左衛門 ○和知村喜三郎

良左衛門ハ性孝慈にして父母親戚に親ふかく、また才幹ありて村役をもよく勤めしかバ、寛政九年銀を賜ひてその行を褒給ふ、そのよし第二編に見えたり、今ハ母のミありて孝養ますくあつく、その家奴婢も少なからねど、母がことをバ夫婦ミづから計らひて人の手にふれしめず、母よはひ傾きて常にうち臥しければ、(14才)日夜そばにありて抑搔り介保に心をつくしける、良左衛門ほかに兄弟なきにより、母寵愛すること深く、常にかれが病のあらんことをのミ憂としければ、良左衛門その心をはかりて、おのれ食に向ふ毎によくもの食ふさまを母に見せて、身の健なるをしらしむ、その心を用うるの厚きこれをもて推べし、かれ孝養のミならず万の行も人にすぐれければ、享和三年亥の七月、文化六年巳の五月、同十二年亥の六月、しきりに銀二枚の賞を蒙りぬ、母ハ八十八歳、良左衛門ハ七十に(14ウ)近しとぞ、これよりさき先公天祐遊獵の時召見給ひて鳥目一貫文を下さる、文化二年のことなり下ノ喜三郎、○喜三郎ハ父母を養ふこと甚厚かりければ、寛政九年賞して米三俵を賜ひしこと第二編に載たり、その後父ハ八十六にして空しくなりしが、その病中もと懇に介保し、夫婦とも日夜つきそひて薬食より起臥二便のはからひまで、人の及ぶべき際にあらず、母ハながらへて齢すでに八十五なり、喜三郎これにつかふることいよく厚く、家人もみな親和らぎて、共に老母を(15

オ) いとほしミける、享和三年亥の七月また賞して喜三郎に米を給ふこと前のごとし、⁽⁵⁾

○吉舎川之内村平左衛門

平左衛門ハ父を藤兵衛といふ、平左衛門 幼より孝友の心厚くして、よく父母の心をうけたがへり、母ハ世を早くし父ハ猶健なり、平左衛門常に質素をこのミ、家人皆麤食しけれど、父が朝夕の飯ハ別によく精けたるを軟かに調へ、酒魚をも日々す、めぬ、父ことに蕎麦をたしミて、吉舎町の市たつ日にハかしこに遊び、蕎麦を^(15ウ) くひ酒を飲むをもて老の 楽とせり、そのゆく時ハいつも平左衛門妻子もろともに、衣服杖 屨とりそろへ、共に扶けて門外まで見送り、或ハ見え隠れにしたがひゆき、帰る時ハ又ミな出迎へてつかかへり、腰をなで脚をさすりて労はりける、年齢きてハ吉舎町へ往くことも心のま、ならねバ、平左衛門が妻ミづから蕎麦をうち酒を進めて、いざ吉舎町へ遊び給ふこ、ろにて楽ミ給へなどいひて興せしとなん、かくて年にまし老衰へ目うすく耳とほく、ありくことさへかなひがたくなりし^(16オ)

〔挿絵第三図〕(16ウ・17オ)

カバ、その心を安からしめんとて、作もの、成熟より家人の出入まで、曲にそのよしを告、ことさら平生の養ひにこ、ろを配り、寝れば衾しきものをつくろひ、よく寝たるを伺ひてのち退き、また父が常に居る所より廁まで縄を張わたして、父が廁にゆく時これを手に執りてつたひて歩む 助となしおき、なほ夫婦のものの幾たびとなく起出てたすける、平左衛門が弟の清吉も心うるハしきも

のにて、先きに父より産を分あたへ、兄も別に家をなさしめんといひしこともあり^(17ウ) しが、清吉ハ、かく共々に暮しさふらふこそ安らかなれといひて、おなじく住ミ、また新吉といふ弟もありて、家すべて十人に近けれど、いと睦じきさま人ミな羨ミあり、父ハ八十余の齡を保て終りしが、其ながらへし時の孝養を褒給ひて、平左衛門に鳥目七貫文を下されける、文政四年巳の六月のことなり、かれ平生友に交るに信あり、力を農業に専にし、年租をささむること曾てその期におくれずといふ、

○高杉村音平^(18オ)

音平ハ伊作が子なり、兄を七郎兵衛といひてひとしく孝子なるが、音平ことに勝れたればとて、文政八年酉の二月賞して米五俵を賜ふ、その状を按ずるに、かれ家もとより貧しかりければ、音平 幼より人につかへて、年々の給銀その外主人より給はりしものハ、ことごとく親に送り与へずといふことなし、のち家に歸りて兄と共に孝養せしが、父音平を別家せしめければ、音平ハ傭夫をなし、またハ商人の荷物をはこぶことなどして世をわたりける、その別家せし時田畑をも分ち与ふ^(18ウ) べけれど、僅なる持高なれば、そのこと心にまかせずと父のいひしかバ、音平、そハ思ひもよらず、これまで御養をうけ、かく成長いたすこと、田地を給はりしよりもありがたけれと答へしとなり、ほど経て父ハやミてうせ、兄七郎兵衛家口多く貧しき窮りければ、老母の養に心を苦しめ、母もまた孫兄らのためにこ、ろを煩ハさんことをおもひやりて、兄に謀り母を我家に迎へ取り、日々朝ハとく起、母が食物をと、のへ、そ

の日の調度もとりそろへおきて雇はれに出来る、其度ごとに」(19才) 必^{かならず} その往^ゆくさを告^つげ、母^はハ老^{おい}ひがミて己^{おの}が意^いにかなハざる家^{いへ}ハゆくことを許^{ゆる}さず、かゝる時^{とき}ハそれとなく出ることをやめ、母^{そは}が側^{そば}にありて藁^{わら}細^{さい}工^{こう}をなしつゝ、おもしろく物語^{ものがたり}などして慰^{なぐさ}め、暑^{あつ}さ寒^{さむ}さの頃^{ころ}ハ近^{ちか}き処^{ところ}にのミゆきて度々^{たび}家^{いへ}に帰^{かへ}り、食物^{しょもつ}の寒^{かん}暖^{だん}をこゝろミて進^{すす}め、寒^{さむ}き夜^よハ側^{そば}ぢかく臥^ふして幾度^{いくたび}もその安^{やす}否^ひを伺^{うか}ひける、人々^{ひと}かれが終^{しゆう}日^{じつ}とめくるしむを見て、妻^{つま}をむかへたすけとせよとす、めけれど、却^{かへつ}て孝^{かう}養^{やう}の妨^{さまたけ}ならんとおもひてしたがハざりき、その頃^{ころ}」(19ウ) 音平^{おんへい}ハ三十歳^{さいじゅう}余^{いよ}なりといふ、

○小田幸村要助妻なを

なをハ糸井村吉兵衛が女^{むすめ}なり、舅^{しゅうと}を文兵衛といひて生^う質^{しつ}執^{しつ}強^{きやう}なるに、よくしたがひつかへ、何事^{なにこと}もその意^いにさかふことなし、文兵衛村の与頭^{よづめ}を務^{つと}め、庄屋役^{しやうややく}をもかねたれバ、年々^{としとし}収納^{しゆなふ}の時^{とき}ハ家に帰^{かへ}ることいつも深更^{しんかう}におよびけるに、夫^{そと}要助^{やうすけ}ハその時^{とき}をかんがへて往迎^{ゆきむか}へ、なをハ火閣^{かたつ}に火^ひを熾^{さかん}にして衣^{きもの}を暖^{あた}め、寢席^{ねむしろ}を安^{やす}らかにかまへ、夫婦^{ふうふ}ともに意^いを配^{くば}りていたはりける、家^{いへ}もと」(20才) 豊^{ゆたか}なりしが、文兵衛村役^{ぶんべいむらやく}を務^{つと}めてより、村人^{むらびと}の租^そ足^{たり}らざる時^{とき}ハ、己^{おの}が田畑^{たはた}を行質^{しちいれ}してこれを足^たすことしばしなりしをもて、家^{いへ}産^{さん}や、傾^{かた}きけるを、要助^{やうすけ}人にすぐれてつとめはたらき、なをハ夜^よふくるまで糸紡^{いとむき}などして生^す理^りをつなぎける、あるとし村^{むら}の里正^{りやう}某^{ある}死^しして文兵衛その家^{いへ}の事^{こと}を幹^{つかさど}り、数^す月^{げつ}我家^{わがや}に帰^{かへ}らざることありしに、夫婦^{ふうふ}日々くひものを持^もちて懇^{ねん}につかうまつり、をりくハつれ帰^{かへ}り珍^{めづ}しきものと、のへて、こゝろよく進^{すす}めしとなん、夫^{そと}が

兄^{あに}を貞右衛門といふ、さきに分家^{ぶんけ}」(20ウ) せしが、いかなる故^{ゆゑ}にや、父^{ちち}が意^いにかなハずして往^{ゆき}来^きすることさへ許^{ゆる}さざりしを、なをハかれが貧^{まい}しきを憐^{あは}れ、夫^{そと}に謀^{はか}りて舅^{しゅうと}が目^めを忍^{しの}び、常^{つね}に麦^{むぎ}米^{こめ}など分^{わか}ち与^{あた}へしかば、貞右衛門もその懇^{ねん}なるを喜^{よろこ}び、父^{ちち}があらざる時^{とき}をうかゞひ農^{のう}事^じの助^{たすけ}などなしぬ、後^{のち}ハ父^{ちち}もほのかにその事^{こと}を知^しりて、怒^{いか}りの心^{こころ}も和^{やは}らざしとぞ、これひとへになをがやさしき心^{こころ}ばへよりかくハなりしと人々^{ひと}感^{かん}じあへり、やがて御^お旗^{はた}ハしありてなをに五^ご俵^{へう}の米^{こめ}を下^{くだ}し給^{たま}ふ、音平^{おんへい}と同じ年^{とし}なり、その後^{のち}も孝^{かう}養^{やう}怠^{おこ}らざりければ、」(21才) 天保二年^{てんぽうに}卯^うの十二^{ふた}月^{つき}再^{また}び米^{こめ}三^{さん}俵^{へう}を給^{たま}はる、

○清綱村小七郎

小七郎^{せうしちろう}ハうまれつき篤^{とく}実^{じつ}なり、父^ふ母^ぼ世^よにありしときそのつかへの詳^{しょう}なること伝^{つた}ハられど、かれ山^{やま}に入^{いり}て草刈^{くさ}るに、某^{それ}の山^{やま}に往^{ゆく}と告^{つげ}て出^でる時^{とき}、その山^{やま}に草^{くさ}なき時^{とき}ハ必^{かならず}帰^{かへ}りてそのよしを告^つげられバ、また他^{ほか}の山^{やま}へゆかざりしとなり、村^{むら}にて小走^{こはしり}といふを務^{つと}めけるに、上^{かみ}を敬^{うやまつ}ひ村法^{むらほふ}を守^{まも}り、年租^{ねんぐ}を納^{をさむ}ることいつもはやく、郡^{ぐん}吏^りこの村^{むら}に至^{いた}ることあれば、その期^きより一^{いつ}時^{とき}も早^{はや}く村境^{むらさかい}まで」(21ウ)

《挿絵第四図》(22才)

出^{いで}てこれを迎^{むか}ふ、そのつゝ、しみの深^{ふか}きことしるべし、またかれが弟^{おと}のわかれ住^すめるが、狂^{くる}ハしき病^{やまひ}ありて久^{ひさ}しく愈^いざりしを、ことに憐^{あは}れミいたはりけるをも、人^{ひと}見^みておよびがたしとせり、文化十二年^{ぶんわにじふに}代^{だい}官^{くわん}より鳥^{とり}目^め若^わ干^{かん}を与^{あた}へ、かれが年^{とし}老^{おい}て行^{おこな}の怠^{おこ}らざるを賞^{しょう}せり、時^{とき}に小七郎^{せうしちろう}七十四歳^{しちじゅうしさい}なりといふ、

卷十三 終 (22ウ)

〈補注〉

(1) 鈴木『芸備孝義伝 初編』(巻七)〔安田女子大学言語文化研究叢書 一二所収〕、鈴木『続編孝義録料六十八』〔同言語文化研究叢書 一六所収〕参照。

(2) 「同六十八」参照。

(3) 鈴木『続編孝義録料六十九』〔同言語文化研究叢書 一六所収〕参照。

(4) 鈴木『芸備孝義伝 二編』(巻七)〔同言語文化研究叢書 一六所収〕「同六十八」、「同六十九」参照。

(5) 『同二編』(巻七)、「同六十八」参照。

〈付記〉 本稿は、「資料翻刻」『芸備孝義伝 三編 (一)』(安田女子大学『紀要』三七号)「同三編 (二)」(安田女子大学大学院文学研究科『紀要』一四集)、「同三編 (三)」(安田女子大学日本文学会『国語国文論集』四〇号)、「同三編 (四)」(大学『紀要』三八号)、「同三編 (五)」(文学研究科『紀要』一五集)、「同三編 (六)」(『論集』四一号)、「同三編 (七)」(大学『紀要』三九号)、「同三編 (八)」(文学研究科『紀要』一六集)、「同三編 (九)」(『論集』四二号)、「同三編 (十)」(大学『紀要』四〇号)、「同三編 (十一)」(文学研究科『紀要』一七集)及び「同三編 (十二)『論集』四三号」に続くものである。「書誌」及び「凡例」は(一)に譲る。

〔二〇二二・九・二七 受理〕